

キャムデンの地誌『ブリタニア』の出版とシェイクスピアの『リア王』 ——土地、相続、権力をめぐる言説——

勝 山 貴 之

I. 序

1586年、ウィリアム・キャムデン (William Camden) によって、イングランドおよび周辺諸島の歴史と地理を記した英国初の「地誌」である『ブリタニア (Britannia)』が出版された。「地誌」とは、本来、その地の成り立ちについて古の昔より説き起こし、その地方の風土や特色を明らかにしようとするものである。キャムデンの『ブリタニア』においても、古代ブリテン以来の歴史をはじめ、国内の階級・宗教・政治などについての解説を前置きに、諸州についての膨大かつ詳細な記述が展開される。しかし『ブリタニア』は版を重ねるごとに、地域の紳士階級についての言及が目立つようになり、彼らの血統や土地財産の相続についての記述が紙数を占めるようになる。それぞれの地方に対する「地誌」本来の考古学的興味と風土に関する関心は、その地域を支配する紳士階級の由緒正しき血筋や土地所有の問題という経済的問題へと拡大し、それを包摂するようになったのである。その地方のありのままの自然を紙面に描き出そうとする「地誌」の試みは、土地を経済単位として見なすようになった荘園領主たちの関心を反映して、彼らの家系とその裕福さの指標となる土地の相続権を書き記す台帳としての役割をも果たすようになったといえるであろう。

紳士階級が自分たちの土地所有・土地相続に関心をよせる一方で、16世紀から17世紀にかけて急激な人口増加を経験した英国は、多くの貧民を生み出

している。人口増加は、土地保有をめぐる激しい競争と地代の値上げを引き起こし、結果的には非経済的な小規模土地保有者・土地借用者を激増させることとなった。食い詰めた者たちは、家を捨て故郷を離れ、放浪の身とならざるを得なかったのである。貧困者たちは、食い扶持を求めて都会に集まり、大都市ロンドンでは、そうした貧困者が巷に溢れ、人々は貧富の差を、すなわち持つ者と持たざる者の格差をあらゆる街角で目にすることとなった。土地への執着は、人々の経済格差を大きく広げることになったのである。

無垢なる自然を、不動産という経済単位に置き換えようとする時代の移り変わりのなかで、その地方の特色を描き出そうとした「地誌」は、土地所有や土地相続という経済的な観念に色付けされ、脚色されることを余儀なくされた。同時に、国内の人口増加は人々の経済格差を広げ、社会的弱者は貧困という名のもとに階級社会の底辺へと滞留していかざるを得なくなったのである。時代を生きる人々は、自らの親族関係にも金銭的価値判断が忍び込み、あらゆる人間関係が経済的な価値の指標によって浸食され腐敗していく様子を、身をもって経験することを余儀なくされたといえるであろう。この小論では、こうした時代の変化の様子をシェイクスピアの劇作品『リア王』のなかに辿ってみることにしたい。

II. 地誌の登場と土地の価値

(1) 地誌 (Chorography) の誕生

*OED*を紐解いて「地誌 (chorography)」という語を辿ると、“The art or practice of describing, or of delineating on a map or chart, particular regions, or districts; as distinguished from *geography*, taken as dealing with the earth in general, and (less distinctly) from *topography*, which deals with particular places, as towns, etc.”と定義され、英語での最初の用例は1559年とされている。しかしL. J. リヴィ (L. J. Levy) によれば、「地誌」という概念は旧く古代ギリシアまで遡る

ことができるという。プトレマイオス (Ptolemy) もその著書『地理学 (Geography)』において、「地誌」を次のように解説している。

Chorography is most concerned with what kinds of places those are which it describes, not how large they are in extent. Its concern is to paint a true likeness, and not merely to give exact position and size. Geography looks at the position rather than the quality, noting the relation of distances everywhere, and emulating the art of painting only in some of its major descriptions. Chorography needs an artist, and no one presents it rightly unless he is an artist. (Ptolemy 26)

プトレマイオスは自らの記述のなかで明確に「地誌」と「地理」を区別していることが知れる。「地理」がその地方の位置や広さを重視にするのに対して、「地誌」はその地方の景観や特色に関心を向ける。従って、「地理」が測量を主とする地理学者の手に委ねられるのに対して、「地誌」の完成には地域を描写するという技術に秀でた「芸術家 (“artist”）」が不可欠だという。

プトレマイオスの記述の中には、「地誌」と「歴史」の違いについての言及は見当たらないものの、「地誌」はその地方の個性を解説するなかで、当然のことながらその土地固有の歴史へ言及し記述することも必要となろう。しかし「地誌」は、その地方に限定された歴史を記述するという点においては、一般的に国家の盛衰を記す学問大系である「歴史」とも区別されるべき異なったジャンルであることも理解されなければならない、トリヴィはいう (Levy, “The Making of Camden’s *Britannia*” 75)。

ルネッサンス期の「地誌」として注目されるべきは、1474年に出版されたフラヴィオ・ビオンド (Flavio Biondo) の『イタリア素描 (*Italia Illustrata*)』であろう。この書物は、北部イタリアを14の地方に分け、それぞれの地方の特色を記している。まずイタリア人の起源について古の時代より伝わる諸説が

披露され、続いて国全体の解説や歴史の変遷の概説がなされる。その後、各地の特色についての記述が展開され、そのなかでは地方史をはじめその土地を治める貴族たちや著名人が紹介される (Levy 75, “The Making”)。また15世紀末には、コンラッド・ケルティス (Conrad Celtis) が『ゲルマニア素描 (*Germania Illustrata*)』という書物の執筆を手がけている。残念ながらこの書物は完成にまでは至らず、断篇の形での出版となった。この他、ドイツにおいても特定の地方の「地誌」が書かれるようになり、人々の間で「地誌」は盛んに読まれるようになった (Levy, “The Making” 76)。

大陸より半世紀近く遅れて、英国においてもようやく「地誌」に関心が寄せられるようになる。1533年、ヘンリー八世 (Henry VIII) の図書館司書であったジョン・リーランド (John Leland) は、「王室付き古物研究家 (“king’s antiquary”）」という新たな職階を与えられ、国中の大聖堂、修道院、修道分院、そして大学などを巡って古文書を集めるという任務を命ぜられた。リーランドは英国各地を隈無く旅し、それぞれの地方の特色を記すと同時に、ローマ人や、サクソン人、デーン人らが英国史に残した足跡を辿るという困難な作業に取りかかる。1534年から1543年にかけてほぼ10年という歳月を旅に費やした彼は1545年に簡潔な報告を「新年の贈り物 (“A New Year’s Gift”）」と題して国王に献呈した。実は、リーランドは収集したあらゆる資料を網羅して、イングランド各地の詳細な描写を60冊におよぶ書物にまとめ、地図を添えて、年内に出版することを計画していた。しかし長期にわたる心労のためか、彼はやがて精神に異常をきたし、1550年3月枢密院は親族に彼の拘禁を要請する。英国における最初の「地誌」の執筆計画は、彼の宮廷追放とともに頓挫してしまふこととなるのである (Levy, “The Making” 77)。

リーランドが夢見たイングランド各地の詳細な記述は完成を見なかったが、この頃になると、「地誌 (chorography)」という語が英語の語彙として容認されるようになったと思われる。先にも触れたように *OED* のなかに “chorography” という語の最初の用例が登場するからである。1559年に出版

されたウィリアム・カニンガム (William Cunnigham) の著書『天文学望遠鏡 (The Cosmographical Glasse)』の中の, “Chorographie shewith the partes of th' earth diuided in themselues.”という一節は, 「地誌」が「地理」とも「歴史」とも異なる, 新たなジャンルとして容認されるようになったことを物語っている。

英国の「地誌」の成立を語るうえで, リーランドに次いでウィリアム・ランバード (William Lambarde) の名も挙げておかななくてはならないであろう。父の死後, ランバード家の長男ウィリアムは, ケント (Kent) 州グリニッチ (Greenwich) のウェストクーム (Westcombe) にある荘園を相続することとなった。ロンドンからウェストクームに居を移した彼は, 1570年「ケント踏査一州についての叙述, 歴史, 慣習 (“Perambulation of Kent: containing the Description, Hystorie, and Customes of that Shyre”)」を執筆する。原稿を友人トマス・ウォットン (Thomas Wotton) に送ったところ, これが様々な人の目に触れるところとなり, やがて大司教パーカー (Parker) や財務大臣パーリー (Burghley) からも称賛を寄せられるに至った。やがて評判の原稿「ケント踏査」は, 1576年に印刷物として出版され, 地方の特色を描いたイングランド最初の書物として大いに読者に歓迎された (Levy 78)。ランバードは, 引き続きイングランド各地の特色を書物にまとめようと考えていたらしいが, 膨大な作業となることから, 計画を断念したと思われる。ランバードとウィリアム・キャムデン (William Camden) の間に親交があったことは, 二人の間に交わされた書簡が残されていることから知れる。ランバードは, キャムデンもまた同様の計画を進めていることを知り, 志を一にする若き友人に道を譲ったのかもしれない。

(2) キャムデンの『ブリタニア』

1586年, イングランドおよび周辺諸島の歴史と地理を記した, 英国初の「地誌」と呼ぶにふさわしい書物『ブリタニア (Britannia)』が出版された。書物はラテン語で書かれ, 八つ折り版550頁のささやかな体裁で, 当初は図版も

含まれてはなかったという。著者ウィリアム・キャムデンは、ウエストミンスター・スクールで教鞭をとる35歳の教員で、彼は大陸で流行していた「地誌」に関心を寄せ、ビオンドの書物をはじめ各地の「地誌」にふれ、その形式に則ってイングランドの「地誌」を書くべく10年の歳月を費やしていた。執筆にあたっては、自ら各地を旅し資料を収集すると共に、リーランドやランバードの収集した資料を盛り込み、より広範で詳細な情報を提供しようと試みている。出版された書物はたちまち評判となり、初版から4年のうちに3版を重ね、1590年には海を越えてフランクフルトでも印刷出版された。1594年に出版された第4版には、多くの図版が添えられ、同時に各地の名士の家系が掲載されている。そして1610年には英語翻訳版 (*Britannia: Or, a Chorographical Description of Great Britain and Ireland Together with the Adjacent Islands*) が、1637年には再版が、更に1695年には新版が刷られた (図1)。引



図1 Frontispiece to William Camden, *Britannia* (1610 English edn.)

き続き18世紀にも版が重ねられ、実に19世紀の初頭になっても出版されている。時代ごとに、新たな要素が付け加えられ、大部な『ブリタニア』へと拡張・拡大していったのである (Levy, “The Making” 70)。

『ブリタニア』においては、まず冒頭で古代からのブリテンの歴史を形作ってきた様々な民族、それぞれの時代の貨幣への考古学的関心、時代ごとの国土分割の様子、階級制度、更には宗教や政治制度の解説がなされ、その後、諸州についての膨大かつ詳細な説明が展開される。それぞれの地方の河川や海岸線の様子といった自然環境、農作物や水産物、更にはその土地に暮らす人々の気質までが、手に取るようにわかるよう配慮されているのである。例えば、ケント州の解説には次のような記述が見られる。

THIS Country , which we now call *Kent*, is not altogether uniform to the west it is more plain, and shaded with woods, but to the east, rises with hills of an easy ascent. The Inhabitants, according to its situation, from the Thames southward, distinguish it into three *plots* or *portions* (they call them *Degrees*,) the *upper*, lying upon the Thames, they look upon to be healthy, but not altogether so rich; the *middle*, to be both healthy and rich; the *lower*, to be rich, but withal unhealthy, because of the wet marshy Soil in most parts of it. It is, however, very fruitful in grass. As for good meadows, pastures, and corn-fields, it has these in most places, and abounds with apples beyond measure . . . (Camden 215)

ケント州の地形描写からはじまり、地図からだけでは知ることのできないその地方の特色や人々の様子が語られた後、産物への言及が続き、読者の興味をそそる。更に、記述は、その地の貴族の血統にも及んでいる。

. . . King Edward the fourth honour'd with the title of Earl of Kent, first

William Nevil Lord of Fauconberg; after his death *Edward Grey Lord of Hastings, Wessford, and Ruibyn*, who was succeeded by his son *George*. He, by his first wife *Anne Widevil*, had *Richard Earl of Kent*, who, after he had squander'd away his estate, dy'd without issue. But by his second wife *Catherine*, daughter of *William Herbert Earl of Pembroke*, he had *Henry Grey, Knight*, whose grandchild *Reginald* by his son *Henry*, was made Earl of Kent by Queen Elizabeth, in the year 1572. He dying without issue, was succeeded by his brother *Henry*, a person plentifully endow'd with all the Ornaments of True Nobility. (Camden 260)

代々にわたってその地を治めてきた貴族たちの名が列挙され、その地がどのように貴族たちの間で継承されてきたのかが明らかにされている。

(3) 世襲による土地所有への関心

英国の地誌『ブリタニア』において展開される特権階級の血統や系譜への関心は、土地所有と土地相続への関心と相通じるものである。地方特有の歴史や風物への関心は、やがてその過去が現代とどのような繋がりを持っているかという問いかけに変わり、それぞれの地方における自然への興味は、相続によって受け継がれてきた土地財産に対する関心という新たな装いを纏うようになった。言い換えるならば、紳士階級の人々は、自らが所有し支配する土地に対する自分たちの権利の正当性を記述した書物を欲するようになったのである。まさに彼らの関心を反映するかのように『ブリタニア』は、経済的評価の基準となりつつあった土地という不動産をめぐる言説をも、そのなかに取り込み、包摂したといえるであろう。

アンドルー・マックレイ (Andrew McRae) によれば、1586年の『ブリタニア』初版から1607年版までのテキスト拡張の変遷を眺めるなら、そこには「地誌」を取り巻く文化的状況の変化が窺われるという。初版が、大陸で出版されて

きた「地誌」を真似て、ローマ人やアングロサクソン人などの遺した地名などに対する考古学的な記述に重きを置いていたのに対し、版を重ねるごとに、あたかも当時の紳士階級の人々の関心に応えようとするかのように、血筋や土地財産の相続に対する記述が増えてくるというのである。

The first edition was directed toward a Continental context of historical research, and follows the model established by the European antiquary and cartographer Abraham Ortelius, by concentrating on the Roman and Anglo-Saxon heritage of British place names. The bulk of the subsequent additions, by comparison, catered to the concerns of contemporary English gentlemen. In particular, Camden greatly expanded his genealogical information, in agreement with an upsurge of interest in the heritage of landowning families. Cartography, like the *Britannia*, was being remodelled as a discourse of the propertied. (McRae 234)

マックレイは、ここで広義の意味において「地図製作法 (cartography)」と記しているが、これを「地誌」という語に置き換えることは可能であろう。まさに「地誌」は、経済的価値を有する不動産という言説の上に再構成されつつあったのである。

上流階級の人々が、自らの系譜と土地相続に強い関心を示すこととなった理由のひとつに、土地をめぐる不動産市場の活況ということも挙げられるかもしれない。土地は、自分たちの領地を増やすために代々の土地所有者たちによって買い上げられたばかりでなく、成功した商人や職人たちも土地所有に関心を示すようになり、こぞって土地売買に参入するようになった。土地を所有するということは社会における彼らの階級の上昇を意味し、紳士階級の裾野に繋がることを意味したからである。1640年において地方の上流階級と目される一族の半数以上が、15世紀末から新たに紳士階級に加わった人々

であったという (Greenblatt, *The Norton Shakespeare* 7)。

そしてこうした「地誌」の記述の変化を、リチャード・ヘルガーソン (Richard Helgerson) もまた、次のように指摘している。

Where the earlier chorographers — Lhuyd, Lambarde, and Camden — concentrated on place-names and made etymology their principal tool, the later ones prefer genealogy and the name of people. More and more, chorographies become books where county gentry can find their manors, monuments, and pedigrees copiously set forth. (Helgerson 133)

ランバードやカムデンが地名や語源にこだわりつつ、その地方に対する考古学的関心から「地誌」を書き起したのに対して、後の地誌編纂者たちは、紳士階級の血統や財産を記すことを当然と考えるようになっていた。まさに地誌は、紳士階級にとって自分たちの代々受け継いできた土地の詳細を記し、自分たちの由緒正しき家柄を誇示する格好の道具となったのである。

後の地誌編纂者の中から一例を挙げるなら、ウィリアム・バートン (William Burton) の『レスターシャーの描写 (*Description of Leicester-Shire: containing matters of antiquity, history, armoury, and genealogy*)』(1622) は、そうした特権階級の関心に染まる「地誌」の有様を如実に表している。バートンの地誌は、レスターシャー地方の地図や風土の描写の他に、その地の紳士階級の人々の家系図の記載に紙数を割いているからである (図2)。それは地方の特徴を記述するだけでは飽きたらず、その地方の上流階級の系譜を、更にはその地方の土地所有者の相続の様子を示すことが重要と考えられていた事実を物語る。そして、これらの兆候は、マックレイの指摘にもあるように、既にカムデンの『ブリタニア』の再版の変化のなかにも辿ることができるものである。

カムデンの地誌の変遷に見られたように、英国の地誌は当時の人々の関

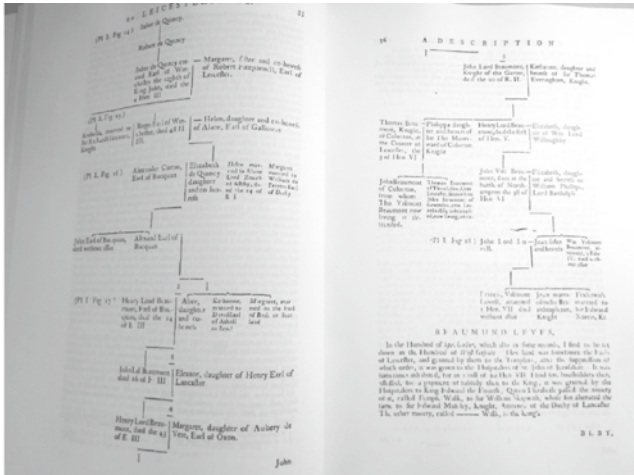


図2 William Burton. *Description of Leicester-Shire. 1622.*

心を反映するかのようには、それぞれの地方の特色と共に地方の名士の由緒正しき血統を記載し、土地財産の相続権の正当性をそこに書き込んでいた。それは土地所有という世襲に対する関心の高まりの証拠であり、無垢の自然描写の中に忍び込む経済的価値の指標を如実に示す一例といえるであろう。現代人の私たちは、不動産の所有や相続をむしろ当然のこととして受け止め、それを取り立てて特別のこととは考えないかもしれない。しかし当時の人々にとって、これは社会全体に影響を及ぼしつつあった初期資本主義経済による大きな価値観の変化であったことを認識しておく必要がある。そして紳士階級の間で土地所有や相続に対する関心が高まる一方で、急激な人口増加やそれに伴う地代の高騰は多くの貧困層を生み出すこととなったのである。

III. 市場経済の荒波と格差の広がり

(1) 人々の土地に対する関係の変化

A. L. バイヤー (A. L. Beier) の『浮浪者たちの世界—エリザベス朝の貧困問題 (*Masterless Men: The Vagrancy Problem in England 1560-1640*)』によれば、エリザベス朝時代の貧困者の数がおおよそ1万5000人をわずかに超えると試算した場合、チャールズ一世 (Charles I) の治世の2万5000人という数は、実に浮浪者が65%増加したことを物語るといふ。1571年から1636年までの人口増加が60%に満たなかったことを考えると、驚くべき数の貧困者の増加である (Beier 16)。

バイヤーは、こうした貧困層の増加の根本的原因を人々の土地に対する関係の変化であったと説明する。

Fundamental to the problem in England was the changing relationship of the bulk of the population to the land. The decisive shift occurred in the later medieval period. In the High Middle Ages the poor were comparatively firmly rooted on the land, even during the thirteenth century when the population grew and destitution increased greatly. There were various responses to the deteriorating conditions, none of which seems to have led to a significant growth of vagabondage. . . . All this changed with the fourteenth-century crisis. At first the lords were unable to resist the pressures for mobility and high wages, and for a few generations after 1380 smallholders and wage-earners prospered at the lords' expense. But the lords were careful not to lose complete control over their lands, and when demographic and economic conditions changed after 1500, the plebeians whistled a different tune. They were no longer part of a manorial economy, but now they faced the chill wind of the marketplace. (Beier 17-18)

封建社会における領主と農民の関係、そして農民と土地の関係は、英国がチューダー朝を迎える頃には大きく変化し始めたのである。そこでは農民は、

領主の荘園経営の一部というよりも、市場経済の荒波にさらされることとなったという。

とりわけ1560年から1640年にかけては土地所有をしない貧民が最も増加した時代といえるだろう。一例を挙げるなら、ケンブリッジシャーの一村落であるチップナムの場合、1279年には土地を所有していない世帯主の割合は3.5%であった。ところが1544年には32%に、そして1712年には63%へと増加している。この村落の例が示すように、英国全体において、土地を保有していない農業労働者は16世紀半ば11%、17世紀には40%へと急激に増加している (Beier 21)。

土地保有をしない農業労働者が増加した一因として考えられるのは、人口の増加である。英国の人口は、1541年の約270万人から、1651年には実に520万人へと、わずか100年の間に約2倍へと増加している (Beier 19)。人口の増大は、当然のことながら土地保有を巡る激しい競争を生じさせることとなった。同時に、それは地代の引き上げを誘引し、その結果、非経済的な小土地保有者が激増するという事態を引き起こした。1600年頃には30エーカー未満の土地ではほとんど採算が取れない状況に落ち込んだという (Beier 21)。

土地を耕して得られる収入の限界は、農業従事者を苦しめ、食い詰めた者たちは家を捨てて、放浪者とならざるを得なかったのである。これら主人を持たない人々の増加は、権力者たちの目からみれば、まさに自分たちの社会的・政治的支配に対する脅威以外の何ものでもなかった。ここに浮浪者に対する厳しい取り締まりが始まる。16世紀後半の社会慣習では、5歳から14歳までの若者は徒弟奉公に出されるのが一般的であり、14歳以上になって職のない者は、牢獄に収容され刑罰を受けることとなるのである (Beier 10)。かつて中世においてキリスト教は、貧困を理想化し、聖フランシスは乞食は神聖なる者であり、聖者は乞食として生きるべきであることを説いたが、16世紀のイングランド社会は貧困と浮浪の増大に警戒感を強め、それらを法的に規制しようとしたのである (Beier 4)。

(2) 首都ロンドンの人口増加

英国全体の人口の増加を概観したが、首都ロンドンを考えるなら、その人口の変化には驚くべきものがある。推定では、1550年にほぼ12万人であった人口が、1600年には20万人、そして1650年には37万5000人へと膨張したと考えられる。人口の増加に応じて貧民の数も急速に増大し、浮浪の罪による逮捕者は、実に1560年から1625年までに12倍に増えたという (Beier 40)。これら多くの浮浪者がロンドンに集まった理由のひとつは、地方都市に比べて、大都市の賃金が高く、多くの働き口があったためであろう。おそらく地方に比して大都市ロンドンの賃金は、50%以上の高賃金であったはずであると考えられている。そのうえ地方の役人は、ともすれば治安を乱す原因となりがちな貧民を厄介者扱いし、首都ロンドンへ送り出した (Beier 45)。しかし大都市ロンドンとはいえ、すべての貧民を受け入れ養うだけの経済力はなく、多くの者たちは相変わず職にあぶれ、社会の最下層から抜け出すことはかなわなかった。食い扶持を得られない貧民たちは、市の祝祭、貴族の葬式など、あらゆる公共の催しに姿を見せ、施しを受けようとしたという (Beier 75)。結果的に、ロンドンの街には貧民が溢れ、街角には常に貧民の姿があった。なかでも放浪の精神異常者はエイブラム・マン (Abram Man) とかトム・オベドラム (Tom O'bedlam) の名で呼ばれた。『リア王』のエドガーは、まさにこうした貧民の姿に身をやつしたのである (Beier 115)。

The country gives me proof and precedent
 Of Bedlam beggars, who, with roaring voices,
 Strike in their numb'd and mortified arms
 Pins, wooden pricks, nails, sprigs of rosemary;
 And with this horrible object from low farms,
 Poor pelting villages, sheep-cotes, and mills,

Sometimes with lunatic bans, sometime with prayers,
Enforce their charity. (II. iii. 13-21)

以上のような、社会の経済的変化、人口変化、そして土地に対する人々の価値観の変化の中で、劇作品『リア王』が執筆されていることを認識しておくなくてはならない。

IV. 土地の価値と人間関係

(1) 「地誌」と王国の分割

シェイクスピアによる『リア王』執筆は、確かな証拠を欠くものの、おそらく1605年から1606年と推定されている。リア王の物語自体は、シェイクスピアの執筆以前から、既に多くの書物の中に記されているが、数ある材源のなかでも1605年に5月8日に書籍商の登録を受けたという作者不明の劇『リア王実録年代記 (*The True Chronicle History of King Leir, and his three daughters*)』は、シェイクスピアの創作過程に大きな影響を与えたとされる。この劇は、おそらく女王劇団 (*the Queen's Men*) とサセックス伯劇団 (*Earl of Sussex's Men*) という両劇団の協力によって、1594年に上演されたという古い芝居だと考えられており、同年に書籍登録されているものの、印刷本として流布した形跡は見られない。ようやく1605年に出版されたこの芝居をシェイクスピアは丹念に読み、自作の構想を練ったと考えられる (Foakes 90)。

この『リア王実録年代記』においてもまた、国王リア (Leir) による王国の分割と娘たちへの移譲の様子が展開されるが、リアの台詞のなかに分割された国土の風景が語られることはない。長女ゴノリル (Gonorill) が口にする、いかに父を敬愛しているかという台詞に、リアは「お前のことばは、なんとこの死にかけた魂を蘇らせてくれることか! (“O, how thy words revive my dying soule!” 253)」と語ったきり、移譲する土地について特に言及はしない

(Bullough 7: 343)。同じくレーガン (Ragan) のことばの限りの愛情表現に対しても、「フィロメルとて、そのような美しい調べを口にはしなかった (“Did never *Philomel* sing so sweet a note.”)」とリアは痛く心を動かされるが、次女に分け与える土地についてとりたてて語ることはない (Bullough 7: 344)。

しかしシェイクスピアの『リア王』における王国分割と移譲の場面では、父親への愛情をことば巧みに表明した長女ゴネリル (Goneril) に対して、リアは割譲する領土の風景を得々と語って聞かせる。

Lear. Of all these bounds, even from this line to this,
With shadowy forests and with champains rich'd,
With plenteous rivers and wide-skirted meads,
We make thee lady. (I. i. 63-66)

リアの口にする国土の様子は、「鬱蒼と茂る森林 (“shadowy forests”）」、「肥沃な平野 (“champains rich'd”）」、「豊かな河川 (“plenteous rivers”）」、「裾野を広げる牧場 (“wide-skirted meads”）」と、まさに「地誌」の頁に繰り上げられる描写さながらその地の風光明媚を窺わせる。同時にそこでは、血統による土地相続が堂々と披露され (“We make thee lady”）」、「地誌」の中に忍び込む血統と土地相続をなぞるかのように、リアの台詞が展開されるのである。長女ゴネリルへの相続分与に続いて、父王への愛情をことばを労して表現した次女リーガン (Regan) へ分け与えられる国土の描写にも、経済的指標が忍び込む。

To thee and thine hereditary ever
Remain this ample third of our fair kingdom,
No less in space, validity, and pleasure
Than that conferr'd on Goneril. (I. i. 79-82)

台詞の中で「広さも、値打ちも、その心地良さも (“space, validity, and pleasure”）」と表現されているように、土地は単に面積ばかりではなく、当然その土地の経済的価値という評価の基準に則って分割されていることが理解される。土地の移譲は、その地の過去の歴史や、伝統・文化などとは全く無縁のまま、経済的価値でのみ判断され、愛娘たちに等分に分割されていくのである。英国の「地誌」に関心を寄せる当時の人々は、まさに目の前で「地誌」の頁を開くかのごとき興奮を覚えたに違いない。

しかしながら、「何もございません (“Nothing” I. i. 87)」という言葉のみを口にし、父王への愛情表明を頑に拒むコーデリア (Cordelia) に対して、リアの怒りはとどまるところを知らない。「言葉を改めぬと、財産を失うことになるぞ (“Mend your speech a little, / Lest you may mar your fortunes.” I. i.94-95)」との警告を放って、年老いた父親は末娘に父への愛情を一同の前で宣言するよう重ねて強要することとなるが、材源となった芝居には「財産」に言及する箇所は見当たらない (Bullough 7: 344)。そしてついには、末娘の予期せぬ返答に失望した老王は、激情に流されるまま、コーデリアに対する親子の縁 (“Propinquity”) も血の繋がり (“property of blood”) も否定し、分け与えるはずの国土の三分の一を上の子供たちに分け与えてしまうという暴挙に出るのである。台詞からも明らかなように、娘の愛と財産を天秤にかけ、子供の愛情を経済的な価値と結びつけたのは、リア自身に他ならない。英国「地誌」のなかで大きな意味を持ち始めていた土地と相続の問題は、それをめぐる親子の人間関係をも浸食し蝕んでいることをシェイクスピアは描き出そうとしているのである。シェイクスピアの『リア王』の世界では、親子の情愛も、うわべの愛情表現とその裏にある財産の授受という打算の上に成り立っているといえるであろう。

引き続き、舞台上では持参金を取り上げられたコーデリアの経済的価値を巡っての台詞が展開され、親子の愛にも、また婚姻の契りにも、すべての人間関係に経済的な価値判断が忍び込む様子を舞台は描き出している。リアは

花婿候補のバーガンディ公 (Burgundy) に向かって、改めて末娘との結婚を望むかどうかを問いたすも、バーガンディにとって王の末娘との婚儀は、それに伴う領土の分割と不可欠である。彼は、あくまで約束された土地の分与を願いでるが (“I crave no more than hath your Highness offer’d, / Nor will you tender less.” I. i. 194-95)、彼の欲求に対するリアの返答は冷淡である。「あの子を大切に思っていた頃はそのつもりでいた、しかし今やあの子の値は下がったのだ。(When she was dear to us, we did hold her so, / But now her price is fallen.” I. i. 196-97)」リアの台詞にのなかで、コーデリアの存在は市場経済の中の品物のごとく喩えられ、その価値は「あの子の値 (“her price”)」とまで表現されるのである。

財産分与を念頭に置いた殺伐とした価値観が舞台上で展開されることに対して、人間の愛情を貨幣価値で量ることを拒む人物の登場は、作品の主題の輪郭を一層明白なものにする。持参金ではなくコーデリアの愛を勝ち得ることだけを願うフランス王は、全く別の価値観を口にするのである。

... Love's not love

When it is mingled with regards that stands

Aloof from th'entire point. Will you have her?

She is herself a dowry. (I. i. 238-41)

女性への求愛を持参金の額に応じて変更するバーガンディの態度を非難し、他の価値判断が忍び込む時に愛は真実の愛ではなくなってしまうことをフランス王は説いている。更に彼は、今や無一文となったコーデリアに関心を示さなくなったバーガンディの薄情さ (“war’rish”) をなじりながら、「水郷 (“wat’rish”) バーガンディの公爵が束になってかかっても、私から値のつけようのない貴重な宝を買い取ることはできない (“Not all the dukes of wat’rish Burgundy / Can buy this unpriz’d, precious maid of me.” I. i. 258-59)」と、皮肉を

こめて返答する。フランス王は、リアの口にした「あの子の値 (“her price”）」という表現に即座に反応し、「買う (“buy”）」と「値のつけようのない (“unpriz’d”）」という互いに意味の相反する語を巧みに一行に託して、変わらぬ求愛の情をこめてコーデリアの手をとるのである。生身の人間を商取引のように扱おうとする価値判断と、それを認めようとはしない価値観の衝突が、見事に台詞に反映されていることに注目したい。材源の『リア王実録年代記』には、存在しない台詞のやり取りである。

更に、親子の愛情を金銭の多寡で測ろうとする登場人物たちの傾向は、姉たちに別れを告げようとするコーデリアに、ゴネリルが浴びせる冷酷な台詞からも窺える。「おまえは従順さというものを軽んじている、自分に欠けただけの分を失ったのよ、当然の報いだ。(“You have obedience scanted, / And well are worth the want that you have wanted.” I. i. 278-79)」このゴネリルの台詞では、“wanted”という語の持つ「欲する」という意と「欠く」という意が逆説的に結びつき、「父親の愛情」と「持参金」の両方の意味に取れるように仕組まれている。すなわち皮肉にも台詞は、ゴネリルの胸の内を巧みに言い表しており、彼女の発想において両者は同等のものであって、父の愛情とは金銭の多寡で測れるものに他ならないのである。

舞台上に様々に展開されるこうした台詞からも明らかのように、劇の前半では繰り返し、親子の愛情や人間関係を金銭的な価値観でもって測ろうとする登場人物たちの傾向が見られる。そしてこの傾向はやがて劇の進行と共に増幅され、長女と次女に虐げられる老王が娘たちの薄情さを思い知らされる場面においても、供の者を減らされるというエピソードとして展開されていくのである。

劇の第二幕において、リアが娘の愛情を測るひとつの指標とするのは、自らの随行する供の者の数である。長女ゴネリルに冷遇され、必死の思いで次女リーガンのもとを訪れたリアであったが、そこでもまた冷たい仕打ちを受けることとなる。王権移譲の際の条件であったはずの100人の騎士も、その

数を半分に、更に四分の一に減らすことを求められるのである。次女の待遇に狼狽したりアは、再びゴネリルのほうへ身を寄せると言い出し、老王は娘の愛を数で推し測ろうとする。

... [To Goneril] I'll go with thee,

Thy fifty yet doth double five and twenty,

And thou art twice her love. (II. iv. 258-60 下線は引用者による)

台詞からもわかるように、リアは娘の愛情をお付きの者として自分に付けることが許される騎士の数で、すなわち自分の世話にかけてくれる財政負担の額で測ろうとする。最早、娘たちの胸のうちがわからなくなってしまったリアにとって、子供たちの愛情は費用の多寡、金銭の額で測ることによって判断するしかない。このエピソードは、ジェフリー・オブ・モンマス (Geoffrey of Monmouth) の『ブリテン列王史 (*Historia regium Briatanniae*)』のなかに登場するが、材源のなかに娘の愛を数で測ろうとする老王のことは存在しない (Bullough 7: 313)。シェイクスピアは台詞を工夫し、愛情をあたかも量りに掛けるかのごとき老王の姿を描いているのである。

「地誌」の頁に土地所有や土地相続への関心が侵入した背景には、「地誌」を手に取る人々の間に蔓延した経済的な価値観の変化が存在していることを指摘することができたように、時代を生きる人々の人間関係もまた経済的な価値基準によって浸食され腐食されつつあったといえるであろう。

(2) グロスター家の家督相続

『リア王』のサブ・プロットとなるグロスター (Gloucester) 家の家督相続をめぐる争いもまた、メイン・プロットに描かれた土地と結びつけられた人間関係を一層強調する働きをしている。嫡男エドガー (Edgar) に嫉妬する私生児エドモンド (Edmund) は、エドガーの相続権をおのがものにしようとする

を練るが、彼は台詞の中で繰り返しエドガーの相続するはずの土地に言及する。

... Well, then,
Legitimate Edgar, I must have your land.
Our father's love is to the bastard Edmund
As to the legitimate. (I. ii. 15-18)

エドモンドにとって、父親の愛情の証は土地相続に他ならない。更に彼は、正当な血筋としての相続権が否定されるなら、己の狡知でもって土地を相続してみせると意気込むのである (“Let me, if not by birth, have lands by wit” I. ii. 183)。

こうしたエドモンドの価値観は、父親グロスターを誑かそうとする際に彼が使用する偽手紙の文章からも窺われる。エドモンドの手になる偽手紙の中で兄エドガーは、父が活着しているため「自分の財産も歳を取るまでおあずけで、その旨味に味わうこともできない (I. ii.47-48)」との不満を抱いているとされる。そればかりか老親を亡き者にし、その収入 (revenue) を手に入れることを企んでいるという (I. ii. 52-54)。こうしたエドモンドの偽計に対して、グロスターは何ら疑いを挟むことはない。時代の風潮の変化とともに人間関係も疎遠なものとなり損得勘定ばかりがまかりとおる世の中であることを意識するグロスターであればこそ、彼はエドモンドの虚言を信じ込むこととなるのである。

Love cools, friendship
falls off, brothers divide: in cities, mutinies; in coun-
tries, discord; in palaces, treason; and the bond crack'd
'twixt son and father. (I. ii. 106-9)

グロスターの台詞は、リアのメイン・プロットと見事に共振し、経済的価値判断に蝕まれる人間関係を描き出している。同時に、社会の変化を肌で感じ、更にはそこに生きる人々の人間関係の変化を、身をもって経験している観客の内なる不安を言い当てていたであろう。

他方、エドモンドは、私生児である自分を自嘲気味に、「相続権のない (“unpossessing” II. i. 67)」私生児と呼ぶが、この語は *OED* によればこの箇所が初出である。社会の価値観を批判しながらも、その価値観に沿って自分の生き方を選択するしかない彼の自己矛盾の悲哀がここにある。やがてエドモンドにすっかり騙されたグロスターは、彼に土地財産の相続を約束する。「わしの領地は、忠実で親孝行なおまえが継げるよう取り計らう。(… and of my land, / Loyal and natural boy, I'll work the means / To make thee capable. II. i. 1.83-85)」台詞に使われた “capable” は、「相続する資格がある (“qualified to inherit”）」という意味で使用され、登場人物たちの間で土地の法的相続ということがいかに重要であったかの証左となるものである。シェイクスピアがサブ・プロット執筆にあたって取材したとされるサー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) の『アーケイディア (*Arcadia*)』では、こうした土地相続問題への言及がなされないことも注目に値する。

しかし土地相続という観点からサブ・プロットを考える際に、エドガー自身のエピソードの重要性もまた見逃してはならない。『リア王』の第一クォート版に付された題名は、「リア王と三人の娘の生と死についての実録年代史劇—グロスター公爵の息子であり相続人であり、陰鬱なトム・オベトラムを装ったエドガーの痛ましい生涯の物語を添えて (“True Chronicle Historie of the life and death of King Lear and his three Daughters. With the vnfortunate life of Edgar, sonne and heire to the Earle of Gloster and his sullen and assumed humor of Tom of Bedlam”）」であった (図3)。劇の題名を見る限り、劇の中心は父親グロスター公の悲劇ではなく、私生児エドモンドの計略により波乱の人生を

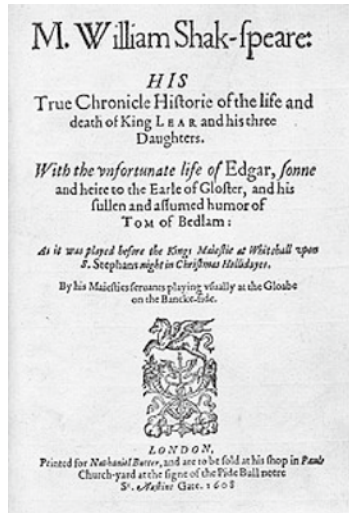


図3 Title-page of the First Quarto of *King Lear* (1608)

送ることとなる嫡男エドガーの生涯の物語ということになる。すべての財産を失った人物の物語という点に焦点を当てるなら、まさにリアは娘たちに自分の土地・財産を譲り渡したのであり、エドガーは相続するはずの土地・権利を腹違いの弟の奪われたのである。リアとエドガーは階級社会の底辺に転落し、無一文になったという経験を共有しているという点では似た者同士の二人に他ならない。リアは、貧民の姿に身をやつたエドガーの姿に、「おまえも二人の娘にすべてを与えてしまったのか（“Didst thou give all to thy daughters?” III. iv. 49）」と思わず声をかけるが、他方エドガーは惨めな老王の姿に「俺を苦しめるものが、老王にはもっと苦しいものになるようだ、王は子ゆえに、俺は親ゆえにだ（“that which makes me bend makes the King bow: He childed as I fathered!” III. vi. 109-10）」と涙するのである。子どもたちに財産を奪われた者と、親に相続権を拒否された者という立場の違いこそあれ、置かれた境遇と胸の内の苦悩は同じであろう。

リアは、自らの身分の証ともいえる100人の騎士を奪われ、娘たちの城を追われた。荒野を彷徨うその姿は、まさに乞食同然である。エドガーもまた、かつては立派な上着にシャツを着て、馬にまたがり剣も携行したというものの(III. iv 129-39)、今ではおおよそ人間の口にするとは思えないものを口にし、汚れた水を飲むことをも厭わない底辺の人間に身を落としている。階級社会の実態は、何をどれだけ所有しているかという経済力に支えられており、所有する物の喪失は、すなわち身分の喪失であり、階級の喪失であることが明らかにされるのである。

英国で初めて「地誌」が出版され、人々の注目を集めるなか、「地誌」の頁に展開された自然風景の描写とともに、そこに描き出された土地が誰のものか、更には誰から誰に相続されたかという事柄に、多くの関心が寄せられた。そうした関心はそのまま劇中の登場人物の台詞に反映され、土地とその相続をめぐる血縁同士の確執へと発展する。土地を不動産としてみなすようになった初期資本主義経済の影響が、時代を生きる人々の内面にも陰影を落とし始めたことは明白であろう。ジョナサン・ドリモア (Jonathan Dollimore) が、その著書のなかで「『リア王』は何にもまして、権力と財産と相続をめぐる芝居である (“...*King Lear* is, above all, a play about power, property and inheritance.” 197)」と述べているのは、まさに劇の本質を看破していると言えるのである。¹

V. 金銭と人間の価値

(1) 「無 (“nothing”)」

食い詰めて故郷を追われ、ロンドンの街中に溢れる浮浪者たちの存在を考えるなら、劇中の台詞は現実世界への問いかけとなっていることが理解される。初期資本主義経済の台頭する社会において、封建社会の体質が徐々に変化し、社会的地位を支える個人の経済力という考え方が蔓延し始めていたこ

とは否めない。リアに向けられた道化の台詞は、老王の真のアイデンティティに言及し、土地を所有しないリアは、そこからの収入を得ることが適わない以上、まさに「無 (“nothing”）」の存在に他ならないことを言い当てる。

Lear. Why, no, boy; nothing can be made out of nothing.

Fool. [To Kent] Prithce tell him, so much the rent of his
land comes to; he will not believe a fool. (I. iv. 133-35)

領地の地代が「無」であるなら、経済がすべて人間存在の基盤となるという発想のもとでは、リアのアイデンティティもまた「無」なのである。すなわち経済観念が優先される世の中では、人間の価値は物質的価値に先立って存在しているのではなく、むしろ人間の価値は物質的価値によって紡ぎだされたものだといえるのである。第1幕において国土を上の子の娘に分割することを宣言したリアは、自らの身に留めるのは、「王の称号とその栄誉 (“The name, and all th’ addition to a king” I. i. 136)」のみだと述べている。しかし「国家の統治、収入、その他の実権のすべて (“the sway, revenue, execution of the rest” I.i.137)」を移譲した今となっては、道化の指摘する通り、その身は生まれたままの裸同然である。

Lear. Dost thou call me fool, boy?

Fool. All thy other titles thou hast given away; that thou
wast born with. (I. iv. 149-50)

「他の称号すべてを手放したからな」という道化の台詞が明らかにしているように、称号の実態とは、それを裏打ちする政治力や経済力に他ならず、老王が権力や財力を譲り渡してしまったからには、残された王という称号はもはや何の意味も持ちはしない。社会的地位や階級の上下関係を形作っている

のは、名声や称号ではなく経済力を背景とした政治的権力であり物質的価値なのである。

まさに追い討ちをかけるかのごとく、道化の台詞は、現在のリアの存在は道化以下の存在、すなわち「零(“0”）」であることを強調する。

... now thou art an O
without a figure. I am better than thou art now, I am
a Fool, thou art nothing. (I. iv. 192-94)

階級社会の実態は、それぞれの人間の内なる資質ではなく、人間が纏っている権力や財力という物質的価値に根源を置く唯物論によって説明される。²そして舞台の展開のなかで効果的に挿入される道化の戯れ歌は、劇の本質を言い当てるが如く、親子の絆も親の経済力によって左右され、人間の価値は所有する金銭の多寡で決まることを謳い上げるのである。

Fathers that wear rags
Do make their children blind,
But fathers that bear bags
Shall see their children kind.
Fortune, that arrant whore,
Ne'er turns the key to th' poor. (II. iii. 47-53)

このように所有資産の多寡のみが問われる社会状況の中で、もはや哀れな貧者は絶望の淵から逃れることはできない。まさに戯れ歌の歌詞が示すごとく、個人の経済力が幅を利かす功利的な世相においては、幸運の女神も哀れな貧乏人には見向きもしないという皮肉な台詞が社会の真実を言い当てている。

そればかりか、こうした個々人の経済力を中心にまわっていく社会におい

では、善悪の価値基準すら、財力によって決められるという。

Thorough tatter'd clothes [small] vices do appear;
Robes and furr'd gowns hide all. [Plate sin] with gold,
And the strong lance of justice hurtless breaks;
Arm it in rags, a pigmy's straw does pierce it. (IV. vi.164-67)

貧者であれば、わずかな悪徳でも罪に問われ、裕福な者は自らの悪徳をその財力で覆い隠す。社会規範の倫理もまた、経済的かつ物質的な価値判断によって支配され、そこに生きる人々の行動を規定するのである。個人の価値ばかりか、社会が個人に強いる倫理的判断もまた初期資本主義経済の潮流に呑み込まれ、押し流されつつある様が指摘される。黄金で造られた鎧には正義の剣もその矛先を鈍らせてしまうという社会に内包された不公正さは、舞台を観守る多くの観客の共感を得たに違いない。

(2) 社会における経済格差と自己認識

道化の台詞や戯れ歌を触媒としながら、階級社会の実態を暴いてみせた舞台は、更なる展開のなかで社会における経済格差に対する老王の覚醒を描いてみせる。リアは、すべてを失うことによって、社会における経済格差の広がりによって初めて気づかされる。

... O, I have ta'en
Too little care of this! Take physic, pomp,
Expose thyself to feel what wretches feel,
That thou mayst shake the superflux to them,
And show the heavens more just. (III. iv. 32-36)

栄華に奢る者はすべての虚飾をかなぐり捨てて、貧者の辛酸苦悩に、自らの身を晒すべきであろうと、リアは絶叫する。富も権力をも手放すことにより社会の底辺に生きる人々の生に目を向けることを学んだ老王は、階級社会とそれと表裏一体を成す経済格差に目覚め、やがて人間の本質に対する認識を深めていくのである。リアは、乞食トムの姿を目の当たりにし、あらゆるものを削ぎ落した人間の本来の姿に気づかされる。

... Consider him well. Thou
 ow'st the worm no silk, the beast no hide, the sheep no
 wool, the cat no perfume. Ha? Here's three on's
 are sophisticated; Thou art the thing itself: unaccom-
 modated man is no more but such a poor, bare, fork'd
 animal as thou art. Off, off, you lendings! Come,
 unbutton here. [*Tearing off his clothes.*] (III. iv. 103-9)

蚕から絹を、牛から牛革を、羊から羊毛をとるように、人間は外界の物質によって自らの身を着飾っている。しかしそうした物質欲をすべて振り払い、いっさいの虚飾を取り去れば、あとに残されたのは「哀れな、赤裸の、二本足の動物」に過ぎない。いかに名誉、権力、財力を誇ろようと、一旦それらを失えば、すべての人間はおしなべて平等なのである。

貧民の姿を通して、土地や金銭などいっさいの価値を削ぎ落した真の人間の姿を、舞台は観客に問いかける。しかし現実世界において浮浪者は、経済の支配する世界の敗者であり、公衆の面前で鞭打たれ、牢に繋がれる反社会的存在に他ならない。人間の本質への問いかけは、物質によって本質が決まるという実体験との矛盾を暴き出し、観客は、経済的価値によって人間の本質が決まるという現実世界の不条理と直面させられるのである。

メイン・プロットのリアの台詞と呼応するかのようには、サブ・プロットの

グロスターもまた、貧富の差の不公平さに言及する。

... heavens, deal so still!

Let the superfluous and lust-dieted man,
That slaves your ordinance, that will not see
Because he does not feel, feel your pow'r quickly;
So distribution should undo excess
And each man have enough. (IV. i. 66-71)

あり余るものを所有し、欲望のままにこの世の生を送ろうとする者に、天の御心を知らすことができるならば、富の再分配が行なわれ、貧者の苦悩を和らげることが可能となるという。初期資本主義経済が、従来の社会構造を変質させつつあるなかで、貧富の差が、すなわち持つ者と持たざる者の格差が広がり、人々の間から慈悲の精神が失われていくことに対する非難と警鐘を、舞台上のグロスターの台詞は伝えているのである。

VI. ジェームズと封建制の復活

リアの覚醒をとおして人間存在の本質を描こうとする舞台は、同時に新王ジェームズの象徴する王権に対する精察をも忘れはしない。1604年にイングランドの王位についたジェームズは、王位に就く以前、王子ヘンリー (Henry) に宛てて自らの君主論を展開した『バジリコン・ドロン (*Basilikon doron*)』を執筆している。書のなかで、ジェームズは古のブリテンにおいて王国を3つに分断したブルータス (Brutus) の愚挙を非難する。

And in case it please God to provide you to all these three Kingdomes, make your eldest sonne *Isaac*, leaving him all your kingdomes; and provide the rest

with priuate possessions: Otherwayes by deuiding your kingdomes, yee shall leaue the seed of diuision and discord among your posteritie; as befell to this Ile, by the diuision and assignment thereof, to the three sonnes of *Brutus*, *Lochrine*, *Albanact*, and *Camber*. (Sommerville 42)

ジェームズは長子ヘンリーに対して、子供たちの間で王国を分割することは後の世に禍根を残すこととなるとし、国土を長男ひとりに譲り渡す長子相続を薦めている。古のブリテンの歴史が教えているように、ブルータスが3人の息子に王国を割譲したことによって、やがては国難を招くこととなるのである。ヘンリーを筆頭に、チャールズ (Charles)、エリザベス (Elizabeth) という3人の子の父であったジェームズの配慮であろう。ここに言及されている“Albanact”と“Camber”は、劇世界のオルバニー公とコーンウォール公を想起させることは言うまでもない。当時、『バジリコン・ドロン』は、新王ジェームズへの関心もあって、多くの人々に読まれたというから、シェイクスピアがジェームズの主張するブルータスの愚挙に発想を得て、国土分割による悲劇の物語である『リア王』を舞台にかけたことは充分考えられるのである。

しかしジェームズを取り巻く当時の政治状況を考えるなら、『リア王』は新王の政治的プロパガンダへの単なる賛同を示した作品と片付けてしまうことはできない。ジェームズ新体制は、彼の主張する王権神授説の裏に、象徴としての王権と政治の実権を握る王権の間に深刻な乖離を抱えていたからである。スコットランド国王であったジェームズは、イングランドの地においても絶対君主としての自分の命令に、すべての国民が従うのは当然のことと考えていた。ところがイングランドでは、国家財政については議会在発言権を握っており、ここに国王と議会の抜き差しならぬ対立が生じていたのである。『リア王』にみる国土の分割と移譲は、財政支援を失った君主の立場を露骨なまでに描き出す。経済的な裏付けのない王権の脆弱さが、人間の極限の形をとおして、舞台上に展開される点を見落としてはならない。

またジェームズにとって王権とは、戴冠の儀式によって授けられるものではなく、代々の王家の血統によって継承されるものであった。従って、国民が王を廃位するなどということはあつてはならず、何人たりとも神の代理人として国王の地位を揺るがすことはできないという王権神授の思想を、彼は自らの書物『独立君主国の真の法律 (*The Trew Law of Free Monarchies*)』の中で唱えている。そればかりか、王国全土は国王のものであり、そこに暮らす人々はおしなべて地主である国王と土地貸借の関係を結んでいるという。ジェームズは議会のあらゆる干渉を排除し、封建制に基づく自らの権利を主張しようとしていたのである。

And to prooue this my assertion more clearly, it is euident by the rolles of our Chancellery (which containe our eldest and fundamentall Lawes) that the King is *Dominus omnium bonorum* and *Dominus directus totius Dominij*, the whole subiects being but his vassals, and from him holding all their lands as their ouer-lord, who according to good seruices done vnto him, chaungeth their holdings from tacked to feoff, from ward to blanch, erecteth new Baronies, and vnitheth olde, without aduice or authoritie of either Parliament or any other subalterin iudiciall seate. (Sommerville 73)

しかし「地誌」が登場し、紳士階級の人々が自らの土地所有に関心を寄せるようになりつつある時代において、国王が王国全土の地主であるという主張が、人々に容易に受け入れられるとは思えない。むしろジェームズが、封建制に基づいた土地の付与や貸与を前面に押し出せば押し出すほど、一層そこには当時の社会に蔓延し始めていた初期資本主義経済的通念との間に摩擦を生み出し、軋轢が生じたのではないか。不動産として市場経済のなかに取り込まれ、流通するようになりつつあった土地に対する価値観は、リア王がすべての土地を手放した時に、自らのアイデンティティをも喪失したように、

ジェームズの主張も、もはや前時代的な机上の空論としか、人々の耳には届かなかったかもしれない。³

VII. 結び：劇の結末と絶望感

英国における「地誌」は、地方の特色を描き出すばかりではなく、当地の貴族たちや荘園領主たちの血統や土地財産の相続の正当性を明らかにし、それを立証するという側面が重要視されるようになった。それは土地所有という世襲に対する関心の高まりを物語るものである。同時に、不動産となった土地の価値に重きを置く風潮は、親子関係の、あるいは人間関係の結びつきそのものを、金銭の多寡で測るという傾向を生み出すこととなったのである。持つものと持たざるものの格差は益々広がり、上流階級が土地の相続に大きな関心を寄せるなか、社会の底辺の生きる、土地を持たない人々の貧困は国中に蔓延していったといえるであろう。経済格差の広がりには、人間とは何かという問いかけと、そこにある矛盾を明らかにすることになったことは否めない。そればかりか、新王ジェームズが封建制度へ言及し、議会の介入を避けるために王の特権を振り回そうすればするほど、経済的後ろ盾を欠いた王権の実像の空しさを露呈することとなり、更に王国全土の地主であるとの王の主張と、いまや不動産と化した土地をめぐる相続の実態との間に広がる乖離を暴露することとなったと考えられるのである。そしてその軋轢と矛盾こそが、シェイクスピアに『リア王』の執筆を思い立たせる契機となったのではないであろうか。

劇の最後で、オルバニー (Albany) は、この国の再建に手を貸してくれるようケントに頼むが、ケントはその問いかけに静かに答えている。

I have a journey, sir, shortly to go:

My master calls me, I must not say no. (V.iii.322-23)

ケントの残したことばには、否応なく経済的価値に重きが置かれ、金銭の多寡という尺度によって人間関係が測られることに対する、ある種の幻滅感が、言い換えるなら近代初期の社会が資本主義経済の潮流に飲み込まれていくことに対する、そして避け難い時代の変化に対する絶望感が垣間みられるのである。

注

- 1 Dollimore は従来の humanist 的批評に真正面から反論を加え、文化唯物論的アプローチを展開したことにより、後の批評家に多くの影響を与えた。拙論もまた、Dollimore のアプローチの影響下にあることを付言しておきたい。
- 2 Margreta de Grazia は、封建社会において人間のアイデンティティはその所有物によって規定され、所有物を失うことによって自らのアイデンティティを喪失すると主張する。そして、こうした考え方が時代とともに商業主義的な発想の影響を受けて、やがて近代においては subjects と objects の相互依存の呪縛関係から解き放たれるのだと指摘している。しかしキャムデンの『ブリタニア』などを見る限り、初期近代においてこそ、人間のアイデンティティが所有物によって規定される傾向が見られ、そうした価値観の反映を『リア王』のなかに跡づけることができる。拙論は、その点で de Grazia の論に反論を試みたものである。De Grazia の pp.17-42 を参照のこと。
- 3 Richard Halpern は、James の主張の反映として *King Lear* を分析し、作品が封建社会への逆行を示すものだと主張するが、拙論はまったく異なる視点から Halpern の論考への反論を試みている。Halpern の pp.215-269 を参照のこと。

参考文献目録

Primary Sources

- Burton, William. *Description of Leicester-Shire: containing, matters of antiquity, history, armoury, and genealogy*. 1622.
- Camden, William. *Britannia: or, a chorographical description of Great Britain and Ireland, together with adjacent island*. 1610.

- Ptolemy, Claudius. *The Geography of Claudius Ptolemy*. Ed. and Trans. Edward L. Stevenson. New York, 1932.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. 2nd ed. Ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton Mifflin Company, 1997.

Secondary Sources

- Aydelotte, Frank. *Elizabethan Rogues and Vagabonds*. London: Frank Cass, 1967.
- Beier, A. L. *Masterless Men: The Vagrancy Problem in England 1560-1640*. London: Methuen, 1985.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. 8 vols. London: Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Carroll, William C. *Fat King, Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Cohen, Walter. *Drama of a Nation: Public Theatre in Renaissance England and Spain*. Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Cooley, Ronald W. "Kent and Primogeniture in *King Lear*." *Studies in English Literature, 1500-1900* 48.2 (2008): 327-348.
- De Grazia, Margreta. "The Ideology of Superfluous Things: *King Lear* as Period Piece." *Subject and Object in Renaissance Culture*. Ed. Margreta de Grazia, Maureen Quilligan, and Peter Stallybrass. Cambridge: Cambridge UP, 1996. 17-42.
- Dollimore, Jonathan. *Radical Tragedy: Religion, Ideology and Power in the Drama of Shakespeare and his Contemporaries*. Brighton: Harvester, 1984.
- Foakes, R. A., ed. *King Lear*. The Arden Shakespeare. London: Thomson Learning, 2005.
- Greenblatt, Stephen, et al., eds. *The Norton Shakespeare Based on The Oxford Edition*. New York: W. W. Norton & Company, 1997.
- . *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England*. Berkeley: U of California P, 1988.
- Halpern, Richard. *The Poetics of Primitive Accumulation: English Renaissance Culture and the Genealogy of Capital*. Ithaca: Cornell UP, 1991.
- Helgerson, Richard. *Forms of Nationhood: The Elizabethan Writing of England*. Chicago: U of Chicago P, 1992.
- Hiscock, Andrew and Lisa Hopkins. *King Lear: A Critical Guide*. London: Continuum, 2011.
- Kahan, Jeffrey, ed. *King Lear: New Critical Essays*. New York: Routledge, 2008.
- Kiernan, Victor. *Eight Tragedies of Shakespeare: A Marxist Study*. London: Verso, 1996.

- Kinney, Arthur F. *Rogues, Vagabonds and Sturdy Beggars*. Amherst: U of Massachusetts P, 1990.
- Laroque, François, Pierre Iselin, and Sophie Alatorre, eds. “*And that’s true too*”: *New Essays on King Lear*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars, 2009.
- Levy, F. J. “The Making of Camden’s *Britannia*.” *Bibliothèque d’humanisme et Renaissance: travaux et documents* 26(1964): 70-97.
- . *Tudor Historical Thought*. San Marino, California: The Huntington Library, 1967.
- Marcus, Leah. *Puzzling Shakespeare: Local Reading and its Discontents*. Berkeley: U of California P, 1988.
- McRae, Andrew. *God Speed the Plough: The Representation of Agrarian England, 1500--1660*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Patterson, Annabel. *Shakespeare and the Popular Voice*. Oxford: Blackwell, 1989.
- Pugliatti, Paola. *Beggary and Theatre in Early Modern England*. Aldershot: Ashgate, 2003.
- Ryan, Kiernan. “*King Lear*: A Retrospect, 1980-2000.” *Shakespeare Survey* 55(2002): 1-11.
- Sommerville, Johann P., ed. *King James VI and I: Political Writings*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Sullivan, Jr., Garrett A. *The Drama of Landscape: Land, Property, and Social Relations on the Early Modern Stage*. Stanford: Stanford U. P., 1998.
- Tennenhouse, Leonard. *Power on Display: The Politics of Shakespeare’s Genres*. New York: Methuen, 1986.
- Traub, Valerie. “The Nature of Norms in Early Modern England : Anatomy, Cartography, *King Lear*.” *South Central Review: The Journal of the South Central Modern Language Association* 26.1-2(2009): 42-81.

Synopsis

The Publication of Camden's Chorography, *Britannia*, and Shakespeare's *King Lear*: Discourses on Land, Inheritance and Power

Takayuki Katsuyama

In 1586 William Camden published a small octavo volume comprising about 550 pages, entitled *Britannia*. This was the first book to introduce into England the latest continental methods of scholarship: chorography, a geographical and historical description of the country. Camden's project was immensely successful: six editions in Latin, each larger than its predecessor, were published, and an English translation, *Britannia: Or, a Chorographical Description of Great Britain and Ireland Together with the Adjacent Islands*, appeared in 1610.

Britannia consists of two sections. A series of chapters offering introductions to historical matters, contemporary social structures, and treating religious and legal administration precedes an account of a perambulation of the several counties (the second is by far the longer of the two parts). It is worth noticing that as the book went through several editions, the latter section gradually came to include histories of royalty, the nobility, and the gentry. Though the original framework of the book remained unchanged, the book's concerns with topography and antiquarian history broadened to include discussions of the inheritance of property and the economy of the land market. What began as an effort to depict the landscape of the country as it then was came to reflect the interests of the

gentry, and of the urban middle class, in questions involving land, property, and rights of inheritance.

In the sixteenth and seventeenth century the essential measure of social status was land ownership, and the exchange of property for cash obviously suggests the protocapitalist exploitation of land. Land was bought up not only by established landowners seeking to enlarge their estates but by successful merchants, manufacturers, and the urban business elite. On the other hand, England experienced increasing and serious problems with vagrancy, largely due to population growth, landlessness, and the penury and insecurity of wage-labor. Vagrancy was regarded as among the gravest of social problems because it intensified at an alarming rate between 1560 and 1640. A number of the migrant poor drifted into the capital.

Population growth in London in this period was dramatic. The overall metropolitan population was about 120,000 in 1550; it rose to 200,000 in 1600, and to no less than 375,000 in 1650. Vagrancy arrests outpaced population growth, increasing twelvefold from 1560 to 1625. In fact, vagabonds might be found on nearly every street corner in Elizabethan and Jacobean England. An upsurge of interest in landowning among the gentry and the middle class eventually led to a yawning gap between rich and poor.

This essay tries to situate Shakespeare's *King Lear* among multiple discourses, especially the economic climate surrounding the publication of Camden's chorography, *Britannia*. The essay analyzes the ways in which people's interest in chorography provided an implicit rationale for the characters' motivation to possess land, and for their interest in genealogy and in questions of inheritance in the play. At the same time it focuses on areas of contention in early Modern England—difficulties associated with feudalism, early capitalism, and the problems of kingship.